

佐々木邦研究ノート

——『笑の王国』の諸短篇より——

藍 木 大 地

一．はじめに

佐々木邦（一八八三—一九六四）は明治末期から昭和三〇年代にかけて活躍したユーモア作家である。今回のレポートでは、佐々木邦の初期作品である大正一四年から大正一五年に発表された短篇、特に単行本『笑の王国』（京文社、一九二六）に収められた短篇に焦点を当てる。各作品を様々な視点から検討することにより、佐々木邦作品に内包された「面白み」や特色を明らかにしていくことを目的としたい。

大正一四年から大正一五年にかけての二年間は、佐々木邦にとってどのような時代と位置づけられるだろうか。

佐々木邦は、明治四〇年一月から明治四一年九月まで『悪戯小僧日記』を『明星』に連載し、文壇に登場した。その後は、『主婦之友』誌上で翻訳・翻案作品を発表しつづける。大正九年、初の創作小説である『珍太郎日記』（一月～二月、『主婦之友』）を端緒に、創作小説も執筆していくこととなる。そして、大正一四年七月『面白倶楽部』誌上に短篇小説「善人」を発表。これを契機に、活躍の場を講談社の発行する大衆娯楽雑誌へと広げていく。以後、『面白倶楽部』誌上へは、大正一五年（一九二六）五月から七月の休みをはさんで、同年一月まで短篇を掲載し続けた。昭和に入ってから、『キング』や『講談倶楽部』誌上で、毎月長篇の連載か短篇を精力的に発表した。しかし、昭和五年からは「ガラムサどん」（二月～三月、『キング』）や「全権先生」（一

月、一二月、『少女倶楽部』などを発表し、昭和九年近くまで長篇に専念するようになる。この昭和五年からの数年間でしばしば「佐々木邦時代」¹⁾と称せられるようになる。

つまり、大正一四年から大正一五年というのは、この「佐々木邦時代」へと繋がり、講談社が発行する大衆娯楽雑誌からの依頼が途絶えなくなるほど人気を獲得した重要な時期なのだ。そして、この二年間に発表された短篇をまとめたものが、単行本『笑の王国』なのである。

この『笑の王国』に収められた一六の短篇は、佐々木邦の作品年譜を見れば、まだ初期の作品といえる。岩本憲児氏は同単行本を「世相スケッチ風の軽妙な会話にみちているものの、『偉大なるユーモリスト』(マーク・トウェインのこと。

——藍木註)に迫る佳作に満ちた短編集とは言い難い」と述べている。とはいっても、短篇を本格的に発表しはじめたこの時期の作品は、佐々木邦文学の原型をなすものであり、見逃すことはできない。次項から、佐々木邦作品の「面白み」に満ちた七作品を選び、言及していくことにする。

二. 作品分析

『笑の王国』には、「はしがき」として、収録された全作品の「荒筋」が付記されている。これは佐々木邦自身が、出版社の「意向」により、まとめたものである。それも参考にしながら、以下、作品の世界をみていくことにしよう。

イ. 「一年の計」

大正一五年一月、『面白倶楽部』誌上に発表された作品である。

次のような話である。

主人公の片岡君は禁酒を思い立ってから時間がかかる。酒に酔うと薄とろに落ちるので、禁酒しなければならぬが、さまざまな理由をつけて長引かせる。細君のお尚が「お酒を仇だと思って」と言えば、「汝の敵を愛せよ」という宗教もある」と言い返すし、「善は急げ」と言われれば、「急いては事を仕損じる」と返す。それでも、やはり命は惜しいので、正月を機に禁酒を決心する。屠蘇さえ飲まず、年始廻りに出かけても名刺だけを置いて帰った。しかし、飲み友達津田君の家

に寄った際、奥さんに屠蘇を勧められ、「ここの奥さんに恥をかかせることはない」と、ついにお酒を飲んでしまう。仕方なく禁酒の開始を新年宴会が終わるまで延期することに。禁酒による圧迫感が解放された片岡君は、正月らしくなってきたと、それから夜中まで三・四軒廻っていく。そして、さあ帰宅しようとしたものの、酔っていてそう簡単にはいかない。結局、溝の近くの道端で寝てしまう。そこを幸い巡査が通りかかる。巡査は急いで俵屋へ手配をし、戻ってみると片岡君は見事に溝へ落ちていた。片岡君の溝泥だらけの格好を見て、俵屋は「明日の商売に差し支えます」と逃げようとす。巡査は「荷車でもいいから」と渋る俵屋を説得して家まで送り届けることになる。荷車の上で片岡君は「新年会までは飲ませておくれ」と寝ぼけて言う。その頃、自宅ではお尚が片岡君の帰りを心配しながら待っていた。もしかすると大川に落ちたのではなからうかと最悪の事態を考えていたのだ。そこへ俵屋が到着し、「大変ですよ」とお尚を呼ぶ。電車で轢かれたのかとお尚が急いで出てみると、荷車が横付けされている。その荷車の上で片岡君が動いていた。俵屋は、溝に落ちて汚い片岡君を爪弾きにしたが、お尚はというと、片岡君が溝に落ちたことに安堵し喜んでいたのであった。

さて、この「一年の計」を読み解くにあたってのキーワードが、佐々木邦のあるエピソードより浮かんでくる。『佐々木邦全集』補巻四の月報に載った鹿島孝二氏の「Clumsy in Speaking」という文章の中からである。

「鹿島君、英語の中で、どういう言葉が一番好きですか」
「とあ……」

だしぬけな質問だったので、私は返事に窮した。すると先生が、

「私は、クラムジーという言葉が好きです」
「……………」

箒川の瀬音が高いので、聞きとりそくなたので、私は、

「何という言葉ですか」
と失礼ながら反問した。

「シー・エル・ユー・エム・エス・ワイ。クラムジーです」

「ああ、クラムジーですか。無器用とか、不細工、という意味ですね」

「そうです。私などはさし当り、クラムジー・イン・スピーキング、話下手です、というところでしょう」

「ご自分が話下手であることをご存知だった。そしておっしゃった。」

「ウィットは器用さから生れるおかしさで、ユーモアはクラムジーから生れるおかしさでしょう」

これは確か、塩原温泉にあった戦病兵の保養所へ慰問講演にご一緒した時のことだから、もう三十数年前で、先生はお若かったし、お元氣でもあった。

「ユーモアはクラムジーから生れるおかしさ」。佐々木邦のおそらく終戦前後の言葉であろうが、この考えは、佐々木邦作品に登場するキャラクター達に共通する性質のように思える。つまり、器用であり、完璧な人間が登場してはこないということである。さらに、「無器用」であったとしても、登場人物達に暗い雰囲気は醸し出されてこない。佐々木邦は、完璧を目指すことが全てではないと考えているからだ。では、この「一年の計」では、具体的にどう「無器用さ」が表れているのだろうか。

だが、その前に佐々木邦の「荒筋」から、若干の考察を加えておくことにする。この作品を佐々木邦は「元日から禁酒を発心した男が溝へ落ちて荷車で帰って来る話」とまとめて

いる。終盤、溝に落ちてしまった片岡君を、このままで放っておけないと、巡査が俵屋に送り届けるよう指示する。はじめ、俵屋は拒否をする。商売道具が溝泥で汚れてしまうのだから、当然のことである。すると、巡査が「荷車でいいから」と提案してくる。俵屋もお客様を荷車で運べないからと、これまた拒むが、最終的には承諾をする。季節は正月であり、このまま放置しておいたら、生死に關わるからだ。つまり、季節と汚さとの兼ね合いから荷車で片岡君を運搬することになったのである。俵屋はそうした理由を知っているが、片岡君の妻のお尚は事情を知らない。だから、片岡君が荷車で運ばれてきても、それについて何の関心もないのだ。なぜならお尚は、片岡君が大川に流されたか、電車に轢かれたのかと最悪の事態ばかりを考えていたのだから。「細君は溝へ落ちて貰ってこんなに嬉しかったことはなかった」。読者は、このお尚の安堵した姿を思い描き、心が温まるのである。

さらに、運搬されている途中、片岡君は、禁酒を破ってしまったことを、夢の中でお尚に謝罪している。お酒を解禁したことを当然のように思っていたが、やはり無意識では妻に對する後ろめたい気持ちがあったわけである。偉そうな態度をとり、妻の進言にも屁理屈をこねていた片岡君であるが、

お尚に対して思いやる気持ちがあるのだというところを読者は垣間見ることになるわけである。

さて、では佐々木邦がどのように「無器用さ」を表現したのかを見ていこう。

この作品における「無器用さ」を体現しているのは、やはり片岡君である。禁酒をしようにもできないのだ。意志薄弱な性格も関わってくることだろう。しかし、果たしてそれだけだろうか。

片岡君の場合、どうして禁酒を思い立ったのかと言えば、それは生死が関係してくる。溝に落ちている分にはまだ良いが、川に落ちて流された日には、命を落としてしまう。また、事故に遭えば、お尚に迷惑がかかってしまう。子供がいないので、この世に妻だけが残されてしまうのである。だから、片岡君は禁酒をしなければならぬのだ。「一年の計」に描かれている片岡君の禁酒には、そうした固い決意があるのである。しかし、それでも片岡君は酒を飲むのだ。なぜか。それは、友人に、正確に言えば友人の奥さんに、お酒を勧められたからに違いない。換言すれば、片岡君はとても人がいいのである。人付き合いがいいのである。「お酒を飲むとお尚に悪い」という考えから、「お酒を飲まない」と友人の奥さん

に悪い」と考えが変わったわけで、人を傷つけない状況を選択した結果なのだ。会社の忘年会の幹事を担当するのも、そうした性格から引き受けたのだろう。

だが、最終的には溝に落ちてしまうのだ。お尚にも心配をかけてしまうのである。おそらく、このあとも片岡君は禁酒を断行するだろうし、解禁をするだろう。それも全て、まわりの人間を傷つけまいとした結果なのである。人に合わせて行動する分、器用にも見て取れるが、そのせいで自分が危ない目に遭っているのだから、それこそ無器用ではないだろうか。自制しながら飲めばいいものを、溝に落ちるほど酩酊してしまうのも、まさに無器用たるゆえんである。

また、溝に落ちるといった点も重要である。もし、そんな片岡君が本当に川に流されてしまったらどうだろうか。読者が受け止める重大さが違う。やはり、次は大川ではないかと示唆しておいて、溝に落ちるのだから、この落差も読者の中に安心感を生じさせ、ほのぼのとしたおかしさを生み出すのである。

ロ・「或良人の惨敗」

「僕も先祖は猿でしょうかね？」という息子の唐突な質問

に、「貞淑な」夫人は「お前のお父さんの親類のことは知らない」と答えた。それを聞いた鳥居氏が「変なことを言う」と突っかかる場面からこの話は始まる。折しも兄から無心を頼む電報が届く。と、二時間後に、夫人は、鳥居氏に考えていた「プログラム」を開始する。まず子供達の前で鳥居氏が突っかかってきたことを咎めたのだ。夫人のあまりの強硬な態度に、鳥居氏は兄にお金を貸すことが不満なのだろうと推測する。しかし、夫人は、相談もなく鳥居氏がそうした行動を独断で行っていることを指摘するのだった。鳥居氏は、兄の「厄挫」などころを謝罪し、今後は相談すると兜を脱ぐ。

ところが、夫人は鳥居氏の「誠意」が信じられないと言う。

そこで、約束の羽織を拵えようと鳥居氏が譲歩すると、あるうことか夫人は既に拵えてあるとのこと。鳥居氏は、羽織を隠れて買うことに対して「誠意」を欠くと非難するが、夫人は冷静さを欠くことなく、取り合ひもしない。鳥居氏は、夫人のそうした態度を見て、「毒婦のようだ」と烈火の如く怒ってしまふ。対して、夫人は鳥居氏が隠れて盆栽を購入したのではと疑ってくる。鳥居氏は否認するも、通帳を見せるよう夫人に言われ、意地になって拒否するだけで精一杯。第一戦は鳥居氏の負け。さて、夫人は暫時休憩を挟んで、第二戦

に取りかかる。今度は鳥居氏が基盤を隠れて買った容疑である。鳥居氏は初めこそ否認するのだったが、夫人が受取証を持っていたことで、結局認めざるをえず。ここで夫人が、腹が立ったので帯を一本拵えていたと告白する。鳥居氏は「お前もナカ／＼隅に置けないね」と、相手の手腕を誉めるばかり。夫人が「私、毒婦でしょうかね?」と、鳥居氏に確認をとろうとすると、鳥居氏は「あれは失言だ。取消す」と謝り、お互いに「堪忍」することとなる。そして、今後、何か買う時には必ず夫人に相談する約束を取り交わす。夫人の戦闘「プログラム」は、夫人の圧倒的な勝利で幕を閉じたのであった。

大正一五年二月、『面白倶楽部』誌上に発表され、佐々木邦が「細君を窺める積りの良人が細君の方にも溜め置きがあったので藪蛇になった話」とまとめている作品である。この作品で目を惹くのは鳥居氏の造形であろう。鳥居氏は、夫人の「プログラム」の前に、抵抗しようと試みるも、あえなく「惨敗」してしまふ。夫人の「プログラム」の周到さに、読者も舌を巻くしかないのだが、同時にこの鳥居氏の言動のほうには親近感を抱くのではないだろうか。親近感とまではいかなくとも、悪い感情を持つことはないだろうと思う。夫人

が鳥居氏に勝利したところで、悪者を退治したという爽快さはない。となれば、この作品の主題は、夫人が鳥居氏に勝つという結果ではないということになる。そもそも鳥居氏は初めから「悪者」としてなど作り上げられてはいないのだ。それは、佐々木邦の「人間観」が大きく反映されているからであろう。随筆集『豊分居閑談』（昭二二年、開明社）に収められている「笑の研究」の中で、佐々木邦は以下のように述べている。

人の間違いが可笑しいのは取りも直さず人の失策が可笑しいということになる。人の悪い話だと考えられるが、軽い間違いだから笑うので、重大な性質を帯びているものなら笑わない。自他共に陥り易い間違いだから笑う。人間はお互に不完全なものだと自覚が前提になっている。人の失策を見て笑うのは己を高しとして喜ぶのではなく、人を自己の反映と見て、人間の弱さに対する共鳴ではあるまいか？

人間は、「不完全」だからこそ、そこに喜怒哀楽が生じ、ドラマが展開されていくのである。佐々木邦の作品世界に存

在する人間は、「不完全」であるが故に「失策」を繰り返すものの、決して憎悪の対象にはならない。佐々木邦は、そうした人間たちを、「愛すべき存在」として書き上げているのである。佐々木邦作品を読むと、根からの「悪者」は存在しない。「不完全」である人間を、作家佐々木邦は裁こうとはしていないからであろう。「不完全」な登場人物たちは、自分たちが「不完全」であることを自覚しているからこそ、お互いに「誠意」のある対応をとる。その場を和ませようと考へ、相手に悪い気持ちを持たせまいとするなど、そうした「誠意」が、作品の「あたたかさ」を引き出していく。それが佐々木邦の作品世界なのである。読者が読後に登場人物たちに悪い感情を抱かないゆえんが、そこにある。

佐々木邦の人間観をふまえたうえで、今一度「或良人の惨敗」を見てみよう。この短篇では、鳥居氏が「失策」を犯している。夫人に隠れて購入したものが続々と明るみになるのだから、最終的には「不完全なもの」として、読者の目には映るだろう。

だが、ここであえて注意しておきたいのは、鳥居氏は初めから「不完全なもの」として描き出されてはいないということだ。鳥居氏は一家の長であるから、強い権力を持っている。

いや、持たねばならないと考えているのだ。ところどころ夫人に尊大な態度を取っているところからも、それは見て取れる。夫人が「日頃貞淑」であるから、一層偉そうな態度は大きくなっていく。そうになると、自然と自分が行ったことに自信を持つようになる。慢心である。慢心が引き起こすこと、それがさまざまな「失策」なのであり、「誠意」を欠いた行いなのである。よって、この作品を私が佐々木邦のように一文で要約しようとすれば、『不完全なもの』であるはずの鳥居氏が、『誠意』を欠き、尊大な態度を取ったがために、夫人から『主婦には主婦の見識がある』として反撃される物語、となる。人間は、「不完全」であるからこそ、お互い「誠意」を持って接していくべきなのだ。

では、どこに「おかしみ」が存在するかと改めて考えれば、鳥居氏の「鍍金」が剥がれていくところであろう。その「鍍金」とは、自分は「不完全なもの」ではないという勝手な思いつきである。「受取証」をポケットの中に入れたままにしていたにも関わらず、夫人に知られてはいないと思いつき、嘘をつき続けていたのだ。何とも初歩的な「失策」ではないだろうか。「鍍金」が剥がされた後の最後の場面で夫人が「安心していますわ。あなたみたいな人を誰が何うするもの

ですか」と「篤く信任」をしているのも、鳥居氏の本質（「不完全なもの」であるということ）を見抜いているからであろう。夫人に言い負かされても、「媚を含んだ目つき」を「浴びせかけ」られた鳥居氏は、「悉皆」忘れてしまう。そうした「愛すべき」人間性が、「鍍金」が剥がれたことで露見してきたのであった（ただ、佐々木邦はこの「媚を含んだ目つき」について、「三十を越しても努力すれば多少の色気は出る」と、やや夫人には皮肉な評を下している。一方、鳥居氏に代表される男性一般の性質が見取れるところでもある）。尊大だったはずの鳥居氏が夫人の「プログラム」によって簡単に退治されてしまう顛末から、読者（特に男性）は「証拠になるようなものはポケットに入れておかない」と強く心に刻むことになったことであろう。世間往々にして、夫人なるものは、夫人独自の「プログラム」を用意しているようである。「不完全なもの」であることを忘れ、「誠意」を欠き、油断してはならない。

ところで、この作品には、初出時に挿絵があり、これまた作品に「おかしみ」を添えている。特に鳥居氏がラジオを聴いている場面である。本文中では、「鳥居氏は食卓の上にラジオセットを置いて長唄を聴いていた。御機嫌の悪い上に元

来盤台面である。レシーバーの銀棒が二本の角のように見え「とある。とても視覚的な描写である。夫人から見れば、独断で行動する尊大な鳥居氏は、退治すべき「鬼」のように映っていたのかもしれない。元来、鬼は退治されなければならぬ。実際は「愛すべき」存在であるにもかかわらず、「誠意」を欠いて、虚勢をはっただけの見かけ倒しの「鬼」であるなら尚更のことである。

佐々木邦作作品は、読者の身近な題材が、読みやすい筆致で書かれているうえに、初出では折々こころしい愛らしい挿絵もついているということがある。挿絵が目にとまった読者は、何の気なしに冒頭を読み始めたとしても、最後まで一気に読んでしまうはずだ。

ハ・「若い雑誌記者の話」

婦人雑誌『婦人之友』の編集部に勤める「私」が主人公。読者から寄せられた恋愛や夫婦喧嘩、嫁姑の不和合などの有らゆる煩悶に「快刀乱麻を断つが如く」に解決するのが仕事である。よって仲間からは「煩悶課長」と呼ばれていた。つまり、「思想穩健」であり、「學術優等品行方正」なのであった。だが、遺憾なことに女に縁が薄かった。絶えず婦人の煩

悶を解決しているにもかかわらず、未だかつて婦人から優しい言葉一つかけてもらったことがなかった。

そんな「私」の隣に婦人記者の曾我さんが赴任してきた。「未だ独身でございませうか？」と聞くほど「私」は曾我さんに惹きつけられ、妙に落ち着きを欠くのだった。前任者が退社してから、読者からの通信を扱うのは「私」独りであったが、女の問題には女の力を借りなければならぬと、曾我さんにも仕事を分担してもらうことになった。黙りこくって仕事をすることも不親切だと、いろいろと話をしているうちに、実は同郷であることが判明する。何故か年齢だけは答えてくれない曾我さんであったが、前任者の黄色い腫れぼったい顔と首つ引きをしていたころとは大分違い、「私」は社へ出るのが楽しみとなっていった。曾我さんが初めて訪問に出た日、主筆（社長）が私の元へやってきて、曾我さんの評価を聞いてきた。他へ廻されても困るので極力推薦をした。すると、実は、曾我さんは主筆の友人の推薦で来たとのことだった。綺麗すぎて心配しており、正当に手に入れるなら困らないが、間違いがあると俺が困ると主筆に言われ、「私」は「信用がないなら辞職します」と勃気（むき）になって答えるのであった。

数ヶ月後の或日、「私」は曾我さんが二十五歳であること

を知る。それから二三日後に曾我さんが担当した通信の中に、「私」が曾我さんのことを忘れられない旨の煩悶が入っていた。そしてなんと、「私」と曾我さんは結婚することになる。主筆に報告へ行くと、とても驚かれたが、「二人で発行部数を大に出し給え」と言われる。主筆に言わせると子供も発行部数なのであった。以上が「若い雑誌記者の話」の大体の内容である。

この作品は、大正一五年三月に『面白倶楽部』誌上に発表された。

佐々木邦は同作品を以下のようにまとめている。「婦人雑誌の煩悶解決係を勤めてゐる若い男女の記者がお互いの煩悶を解決してしまふ話」。簡にして要を得た「荒筋」である。

この「荒筋」は、同作品を読んだあとに再読してみると、より面白く味わるものになっている。ここに記されている「煩悶」の正体が分かるからであり、それを知った読者は、この「荒筋」を見返して、「うまい」と思うことだろう。

この作品は、曾我さんに対する好意を中心とした「私」の心情と、「私」の仕事の内容紹介といった二本柱で構成されている。そのどちらもユーモラスに描かれており、読者を飽きさせない。佐々木邦の真骨頂が発揮されている作品である

と言つても差し支えないだろう。この二本柱について、詳細に見ていくことにする。

まず、後者の仕事内容についてとりあげねばならない。そもそも「私」と曾我さんが出会つてから結婚するまでの話ならば、この仕事紹介は不必要な要素であるはずだ。だが、佐々木邦はこれを書き込むのである。その理由を探ってみた。「私」は読者の通信を取り扱う仕事をしている。その通信の身がいくつか紹介されている。「おなつかしき記者さま」で始まる婦人からの煩悶や、「記者足下」で始まる男子の煩悶である。それらの煩悶は内容によつて解決法が変わってくる。美容や育児、法律などは、それぞれ担当の主任にまわすことになっているが、「夫婦間の根本問題」などは「私」が独身者の立場から「針路」を示している。さらに、男子からの煩悶も「私」が解答している。この解答が、ミスと言えるだろう。懇切丁寧なものではないため、読者はクスリと来るのだ。例えば、小学教師の男子からの通信で、同僚と恋愛関係に陥っていたが、郷里より富豪の美人との結婚話を持ちかけられてからというもの、その同僚が醜く見えてきてしまい、どう問題を解決したら良いかというものがあった。「私」は、「同僚の醜婦と結婚して美人は此方へ廻せ。娘の番地至

急御一報あれ」と返答する。どう読んでも親身になっていない。その理由としては、「私」の境遇と性格が大いに関係している。「私」は婦人雑誌の編集部に勤めているにもかかわらず、女性と縁の無い生活を送ってきたのである。どんなに女性の煩悶を解決してこようが、回答者の顔が雑誌に載っていないのだから、「私」の功績を社外の人が知ることはない。世間に通じないのである。自分から言ってしまうはいいいのだが、「私」はひげらかさうとはしない。「私」は、仕事の内容と世間の評価の違いに戸惑い、失望しているのである。よつて、「私」の心は、荒んでしまったわけなのだ。その心の荒んでいる様子が、先に挙げた煩悶の解答にもよく表れている。煩悶解決という仕事内容の紹介には、世間から送られてくる煩悶というのは、第三者の目から見るとくだらないものにつるといふ皮肉のようなおかしみも含まれているだろう。しかし、それだけではない。「私」の歩んできた人生、そしてそこから形成された性格というのを巧みに描写するために書き込まれたものである。

さて、そうした境遇と性格の「私」なのだから、当然婦人に対して積極的に行動できない。そこには自ずから「無器用さ」が生まれてくる。同じ編集部に赴任してきて、机を並べ

ることになった曾我さんに一目惚れした「私」は、恐る恐る会話を敢行していく。仕事の内容から徐々に私生活に関する質問を繰り返すものの、曾我さんに見事にはぐらかされる。

だが、「私」には悲しむ様子がなく、反対に会話が出来たことに対する喜びが見て取れる。これまで評価されなかった「私」の性格を、理解してくれる女性が出現したのだ。読者は、この「私」の進歩を微笑ましく見守ることになる。そして、「私」が曾我さんへの告白に利用したのが、自身が従事してきた「煩悶解決」なのである。ここもなんと「無器用」なのだろうか。名前を出さずに、煩悶解決の依頼状を認め、曾我さんに渡している。不安であるが故に、直接対面するのではなく、自身が一番よく知る方法を選択したわけだ。決して洗練された手法とはいえない。世間に通じない悲しみを知る「私」が、「無器用」ながらも、自身の恋を成就させる、それがこの「若い雑誌記者の話」であるといえるだろう。

ところで、主筆の存在の大きさも見逃すわけにはいかない。特に、最終盤の台詞である。結婚を祝福するとともに、これからも会社のために働いてほしいという願いが、「二人で発行部数を大に出し給へよ」という台詞にこめられているのだ。人情味があふれ出ており、読者の心はほんのりと温められる

ことであろう。

二、「恩師」

この「恩師」は、大正二五年四月に『現代』で発表された、佐々木邦自身が「ストライキをして追い出した旧師に限り合つて美事仇を討たれた話」とまとめた作品であるが、どんな話であるか、見ていくことにしよう。

舞台は大正の不景気な日本。就職活動をする、ひどく運が悪い男である「私」が主人公。ある日学校に掲示された、神戸にある「不二商事」外国課についての案内を見て、親友の浜口君と申し込んだ。不二商事は二流に属する会社で、求人条件は英語が特にできる「中くらいの成績」の人ということだった。成績が優秀で無い「私」に見事に適合していた。

面接の日時が決まり、「私」は、下宿先にいる清子さんに話をする。「私」と清子さんは互いに結婚をしたいと思っている仲である。清子さんは不二商事の話を知ると、一緒に神戸に行きたいと言いつ出す。母親の同行を私は提案したが、清子さんは「我儘出来ませんもの」と取り合わず、「お邪魔？」と媚を含んだ目で私を見つめてきたので、私は水母のようになつて了承してしまふのであった。

そして、面接の当日、会場の便所に行った際、一人の紳士と「私」は出会う。その紳士はなんと、私が中学生のころ、ストライキを起こして追い出した英語の教師であった。「私」はのちに浜口君の話で、面接官であることがわかる。私は「駄目だ」と覚悟を極める。「私」はストライキを起こした当時、級長を勤めていたおり、その張本人だと思われると考えたのだ。ところが、私の番が回つてこないまま、面接が終わつてしまう。浜口君が会見室に聞きに行くと、「あれはもう分かつている」と言われ、奥に引つ込んだという。私は落ち込み、帰路につく。ところが翌朝、採用者の発表がされると、なんと私の名前がある。浜口君と共に合格していたのだ。私は急いでその日を休日と決める。その理由は、清子さんへの報告、故郷や従兄への手紙、そして恩師への礼文を書かなければならないからであった。

大正期の不景気が原因の就職難を素材にした短篇であり、これは現代にも通じる内容ではなからうか。

この作品で焦点が当たっているのは、「態々二流会社を志望する」ような「優秀でない」学生たちである。決してエリートでもなければ、学校についていけずにやぎれたような人間でもない。自分の性能(?)を自覚しながら、就職難に

果敢に立ち向かう、前向きな性格の持ち主たちなのだ。だが、いかんせん頭がよろしくない。それが特に描かれているのが、「不二商事」の面接の場面である。求人条件が「英語のできるもの」であるというのに、面接の質問が英語でされると、慌てて不安になってしまう。英語で訊かれていること以外に何を言われているのか分からない者や、電話の応対の実演で「もしもし」を「five」と言ってしまう者。どうして試験を受けたのかと思ってしまう面々だが、それだけ就職口が少なかつたということであろうし、それだけ自分の「運」に賭けていたのだろう。そこにも、社会に貢献したいと思いつながら、就職出来ない人物の「無器用さ」が見て取れないであろうか。

そうした中、この作品で「無器用さ」を特に醸し出しているのは、主人公の「私」であろう。

運が悪いと自覚している主人公の「私」が、会社の面接で出会った紳士は、かつて級長を勤めていたところにストライキを起こして追い出した英語の教師であった。不合格と思うのも当然だ。「私」は、その英語教師を「素敵に出来る」と評価していたのだから、なおさらなのである。さらに、私の不安を煽ったのは、「私」だけ「あれは人物がわかっているから」と面接を行わないことだった。「江戸の仇を長崎で討つ

んだろう」と「私」は憤ってしまっ

ここで「浜口君」に少し目を向けたい。面接の場面では、浜口君の優しさが、読者の心を和ませる。浜口君も成績は良くないのだろうが、「私」を必死に励ましてくれる。「運が悪い」と後ろ向きの「私」には、ぴったりの人物である。成績では一括りにされてしまいかもしれないが、人間は当然多種多様なのだ。

話を「私」に戻そう。

結局、「私」は合格をするのだが、英語の教師は「私」が有能な人間だと「よくわかって」いたのである。つまり、「私」をストライキの張本人とも思っていないし、英語がよく出来る人間だと評価していたわけである。これは描かれていないから推測になってしまいが、中学生当時、ストライキを同級生たちが起こした時も、「私」は「運が悪いな……」と、周囲の状況を嘆き、諦めていたのではないだろうか。そこを英語の教師は見抜いていたわけである。だが、「私」は全て悪い方向に考えてしまい、憤っているのだ。その周囲の人々の考えと、予想していた内容とが合致せず、振り回されてしまうあたりが、なんとも「無器用」でなからうか。

さらに、「私」は、「貰いたい」と願っている清子さんにも

振り回されている。神戸に一緒に行きたいと「我儘」を言い出した場面からは、結婚後に「私」が清子さんの尻に敷かれるのだろうか」と読者に予期させるだろう。ただ、この「我が儘」は、おそらく「私」の性格を知っているからこそ、清子さんは行なっているのだ。

この「私」の性格の良さは、面接後に浜口君と銀座の不二家に行った場面からもわかる。「自分のために友達の興を殺ぎたくなかった」と、「努めて快活」にしていたのだ。そして、清子さんにチョコレートを土産に買って帰る。自分は運が悪いかも知れないが、それと他人は関係ないと考えている証ではないだろうか。

「不二商事」に採用され、そこから慌ててお札や婚約の話を進めようと動く「私」の姿は、読者に「よかった」と思わせる、ほのほのとしたものに映るのである。

ところで、佐々木邦は、この英語の教師が「私」を採用したことについて、「美事に仇を討たれた」と要約している。

これが「はじめに」で書かれているのだ。読者はまずこの「荒筋」を読んでから本編を読むわけで、どんな物騒な話だろうかと身構えて読むだろう。ところが、「恩師」はまったくの心温まる話なのだ。佐々木邦の読者を楽しませようとす

る精神が、この「荒筋」からも見てはとれないだろうか。

ホ・「恐妻病患者」

「恐妻病患者」は四月に『面白倶楽部』誌上に発表された。現在、全集には収められていない。まずは、物語のあらすじを確認したい。

現在の会社に勤めてから三年経った吉川は、妻に住宅新築の話を持ち出す。しかし妻は煮え切らない返事ばかりをする。これまで吉川が勤めていた会社は、入社三年目になると経営が悪化しては解雇されるということが二度あったから、妻は心配しているのであった。

そんな吉川が帰宅せずに、仲の良い同僚と銀座へ飲みに行く際、必ず七時半になると帰る者がいた。相馬君である。相馬君は会社から電車で一時間、さらに徒歩で五分のところに住んでいるが、早く帰る理由はそれだけではなかった。吉川は、相馬君が「恐妻病」にかかっているのだという話を聞く。相馬君の奥さんは美人だが、大柄であり、相馬君は組み伏せられてしまうという。さらに御主人筋の人間であるが故に頭が上がらないとのことである。さまざまな噂の中で、相馬君が奥さんと結婚したのは、力尽くで接吻をしたからだ

いうものがあつた。吉川君は本人に真相を訊いた。相馬君が不二子さんと話の流れで、力尽くで接吻することになる。わざと転んだ不二子さんと抱き合っていると、その姿を御主人に見られてしまう。そして責任を取って結婚をするように言われたのであつた。

そして数日後の日曜日、吉川君が妻と三越の食堂に入ると、隣の席で二人前の食事をとる大柄の女性がいた。相馬君の妻だと直観的にわかつた。翌日、相馬君に奥さんが二人前頼んでいたことを話すと、「退つ引きならぬところを見つかつたね」と頭を搔いていた。

この作品について、佐々木邦は「七時半になると必ず中座して驀地に家路へ急ぐ若い会社員の話」と要約している。

それでは、内容を見ていこう。

登場人物を見てみると、いくつかの点が指摘できる。語り手の「僕」は会社が三年目になると潰れてしまう、運が悪い男である。会社が倒産してしまうのは「僕」だけの問題ではない。一社目は大戦後の不景気、二社目は震災が関係している。つまり、当時の多くの人々が直面した大問題が原因となっているのである。当時の読者は、震災や不景気についてまだ忘れてはいないはずである。それでも立ち直つて会社に勤

める「僕」に自分の姿を重ね合わせていたのではないだろうか。

次に相馬君である。相馬君は飲み会の場でよく話題になる。これは会の途中で帰つてしまうからだ。「僕」は同僚が話をするのをよく耳にする為、「相馬君の消息に丈け殊に造詣が深くなつた」と言っている。しかし、同僚は陰口を叩こうとしていたのではないようで、体の大きくて強気な奥さんをもらつた相馬君について「果報ものだよ」と褒めたりしている。飲みに行く仲の良い同僚だから、悪口にならないように注意をしているのである。微笑ましい場面だ。

「恐妻病」に罹るまでになつた相馬君が、なぜ不二子さんと結婚したのか、「僕」は理由を本人から聞くことになる。同僚から理由を聞いていたが、話が一致しない。そうした状況を「歴史上の大問題に能くある通り、権威者の主張するところが兎角一致しない」と書いてある。相馬君の真相と歴史の大問題が並立されており、この取り合わせがおかしみを生んでいる。

大柄の不二子さんは、わざと転んで相馬君に隙を見せたあたり、策士であるように見える。どこまでが策なのかは記述はないが、おそらく前日に見たとされる劇を見て、思いつい

たのではないだろうか。つまり、相馬君にそこまで意識がなくて、不二子さんの方が気があったのである。確かに、相馬君は相手を傷つけるような言動はなく、相手を疑うようなこともない。責任を取って結婚するあたり、責任感も強いであろう。

最後の場面、三越の食堂で「僕」は一目見ただけで、不二子さんを判別する。二人前の食事をとっていただけである。どれほど大柄なのだろうか。それだけでも面白いが、「僕」の報告を聞いて、相馬君が頭を掻くところは、容易に想像出来る（挿絵は単行本にはついていないが）。相馬君は恥ずかしいながらも、それでも不二子さんのことを好きでいるのだ。それを知っている読者は、二人の良好な関係に心が温まるのではないだろうか。

へ・「容姿端正アウテンゲン正会セイカイ」

羅紗問屋の若旦那（進一）が無事にアメリカから「轢き殺されず」に帰ってきた。若旦那は、店員達から「あの英語が通じたか何うか怪しい」とか「日本語だって例の名言集ですから」などと言われるほどの頓狂ものである。そんな若旦那は、店員達に対して、「容姿端正アウテンゲン」や「能率エフシヤウレイ」といった

「洋行土産」である「註文」を多くつけるようになった。

ある日、大番頭の則近さんが無精髭を生やしていることに、若旦那は気づいて、「彼方」では無精髭を生やして事務を執るものはいないと注意をする。さらに、「容姿端正」でない者からは、一回五十銭の罰金をとることを提案しだす。大旦那が「罰金を前金で出す」と途中ごねたが、残りの一同は賛成した。そして、罰金制度が「容姿端正会」として翌日から開始されることになる。だが、皆十分に警戒しているために、なかなか罰金を取られるような者は出てこない。結局、五日で徴収できたのは、たったの五十銭だけであった。

折しも一軒置いて隣の「カッフェ」から女給の自殺騒ぎが伝わってきた。若旦那はスリッパのまま一人で駆け出して見に行く。その迅速な行動に、大旦那は「能率を投げ出して行つてしまひました」といい顔をしない。よつて、店員達は見に行きたくとも見に行けなくなつてしまふ。少時「油を売つた」とあと帰ってきた若旦那は、店員たちに事件の報告を話し出すものの、その女給が「鼠入らずを呑んだ」と、「猫いらず」のところを間違えて言つてしまふ。この言い間違いを契機に、罰金の条件に「言葉」も加わることになる。早速若旦那が言い間違いを犯し、罰金を支払う。若旦那の従兄で隣席

の吉澤君が喜んで徴収していく。若旦那は仇討ちを思い立つてクイズを出す、吉澤君はクイズに引つかからず、反対に若旦那が言い間違いをして、「反り討ち」を食ってしまう。若旦那はその日罰金を五円納めた。これでは、若旦那一人で総見を背負って立つことになってしまう……。

大正一四年一二月、『面白倶楽部』誌上には「頓狂な若旦那」として発表された作品である。この作品の佐々木邦による「荒筋」は、「アメリカ帰りの若旦那が店の能率を上げる話」となっている。

「容姿端正会」は、『笑の王国』に収められている一六作品の中で唯一、改題をされた作品である。その点から考えていきたい。「頓狂な若旦那」と「容姿端正会」。何が異なり、何を意図して佐々木邦は変更を行ったのだろうか。私は、読者の意識を、「頓狂な」性格の持ち主である「若旦那」から、「容姿端正会」に所属する他の店員達にも向けるためであろうと考える。確かに、この短篇の中心にあるのは若旦那であり、彼の行動は「頓狂」なものである。だが、「頓狂」であると評価を下しているのは、他の店員達なのである。自分たちを勘定には入れていないのだ。第三者的立場にいる読者は、果たして若旦那だけを「頓狂」と見るだろうか。女給の自殺

騒ぎはどうだろうか。大旦那に止められたがために、現場に駆けつけることはできなかった。しかし、仕事に没頭するかといえば、そんなことはない。「何誰だろうか?」「お花さんか知ら?」「まさか芳江ちゃんもあるまい?」「露ちゃんだと俺は泣いちゃうぞ」と気にしているのだ。人の生死が関係しているから心配するのは当然かも知れないが、仕事なのである。決して切り替えることはできない。なぜなら、そこには「自分の手をつけている女性だったらどうしよう」という、男性の「悲哀」が表れているからだ。いつも女道楽に興じていますと、公言しているようなものである。さらに「吉澤君」などはどうだろうか。若旦那は、この「容姿端正会」を、「能率」を上げるためだと言いながら、その実「罰金を徴収すること」に力を注いでいる。その様子は、「頓狂」そのものである。だが、結局は「容姿端正会」に所属する面々も、相手の「失策」を見つけることに執心している。その最たる存在が、吉澤君なのである。吉澤君は、終盤、若旦那の言い間違いを喜んで指摘し追及している。こちらも仕事中の所行である。この作品を彩る登場人物達は、「若旦那」だけでなく、「若旦那」を筆頭に、「頓狂」な人々の集まりなのである。

では、その「若旦那」についても見ていこう。この「若旦那

「那」は、「アメリカ帰り」であるという点が重要である。若旦那がアメリカから無事に帰ってきたことに関して、「瘋癲白痴を護る賜物」のおかげであると周囲の人々は見ている。

さらに、言葉に関しては、「大部分ゲラ刷りのまま頭に入つてゐる」ため、大旦那も心配しているほどののである。ところが、若旦那は言い間違えた際に、すんなりと罰金を支払っている。それは、「諺語辞典か初校のまま、頭に入っていること」を「自分でも不便に感じてゐる」からである。自分の「頓狂」ぶりを自覚しているのである。周囲の人間は、若旦那が「極く好人」だから「よく懐いて」いる。だからこそ、言い間違いもすんなりと指摘出来る。だが、指摘される方からすれば、気持ちのいいものではない。自身の悪いところを改善しようとするだろう。その一環としての、「アメリカ」留学ではないだろうか。何としても周囲の人間を見返したいと勉強した結果の、「容姿端正」や「能率」だったのである。自身が成長したところを見せつけようとして生まれたのが「容姿端正会」で、若旦那は自分が指摘する側に回らなかったわけである。そう考えれば、何とも「愛らしい」動機ではないだろうか。この作品は、若旦那の「頓狂」ぶりを楽しむのが主題ではないのだ。「アメリカ」で学び、成長をし

た姿を周囲の店員達に見せつけたい一心で作り上げられた「容姿端正会」の中で奮闘する若旦那を見守ることが中心なのである。だからこそ佐々木邦は改題を施したのではなからうか。

佐々木邦は、この作品でも「失策」を描いている。だが、今回はその「失策」をする人間にあるのは、「おかしみ」だけではない。人間は「不完全なもの」なのである。「失策」を繰り返すのは当然なのである。言い間違いなど、誰でも犯すことだ。しかし、それをあげつらつて、相手を貶めるのはよくない。人間なるものは、本質が「不完全」なのだから、それを隠そうとしなくていいのだ。佐々木邦は読者にそう「温かい」メッセージを送っているのである。

ト。「善人」

「美しいタイピスト」の津田さんが、「僕」（磯貝）の同僚で同宿である小西君と結婚することになった。実は、その二人の仲人役を「僕」は知らぬ間に半年間も勤めていたのである。小西君は「僕」よりも一つ年上であるが、同期入社で、全くの「同輩」であった。前任者として机を並べていた二人は喧嘩ばかりしていたので、支配人を初め多くの同僚は、

「兄弟仲好く」するよう註文をつけるのだった。「僕」は小西君に兄事し、打ち解けたが、ある朝、「僕」と小西君の間にもう一つ机が設けられていた。雑談が多すぎるが故であった。一年後、その「僕」と小西君の間が空席となり、新しく津田さんが占めることになった。津田さんが初めて来た日、「僕」が津田さんの話題を出すと、小西君は興味がなさそうに「あんなものに迷っちゃいけないぜ」と繰り返し、忠告してくるのだった。その翌日、小西君は目を悪くしたと言って眼科に行き、仰々しく目蓋をして帰ってきた。そして、席が暗い場所であり、仕事に支障が出るからと、津田さんはそのままに、僕と席を入れ替わることに。だが実は、これは小西君の「芝居」で、「羽左衛門」に似ている顔の反面を津田さんに見えるようにしただけなのである。その後も小西君はいくつも策略をめぐらしていったが、「僕」は一切気づかず、反対に悪い風評がたたぬよう、津田さんから距離を取るような行動をとる。その後、男女間の交際は禁止だから、三人で行動を取るようになっていった。そんな折、友人の山崎君から、津田さんと小西君が怪しいとの噂を「僕」は何度となく聞いた。

「僕」は取り合うことはなかったが、ある日、小西君が帰郷を理由に欠勤した。「僕」は津田さんと「水入らず」だと喜

ぶが、津田さんも欠勤していた。失望の心で帰宅すると、机の上に「ツタサントケツコンスルタノム」と電報が載せてあった。「僕」は山崎君の言葉を思い出すと同時に、自分が「善人」であると深く思い当てるのだった。

この作品は、先にも述べたとおり、佐々木邦が『面白倶楽部』誌上に初めて登場した大正一四年七月に発表された作品である。換言すれば、佐々木邦が短篇を本格的に創り出すことになった第一作目となる。この作品から自身の信条と読者の要望をどうすり合わせていくかを、佐々木邦は探っていくことになるわけである。となれば、読者の要望というものがまだ自身に届かないのだから、自身の信条が前面に出された作品であるというように考えることもできるだろう。

「美しいタイピストを見すく／＼同僚に取られてしまふ油断の話」と佐々木邦が「荒筋」としてまとめているように、この作品のキーワードは「油断」ということになる。誰が「油断」をしたかといえは、語り手の「僕」（磯貝）である。では、なぜ「油断」したのだろうか。それは、相手が兄事していた小西君だからである。そして、津田さんに近づかなかつたのは、体裁を気にしていたからである。つまり、「僕」という人間は、同僚の評価を気にするほど、周囲について目配

りをして、さらに友人には全幅の信頼を置いていたのである。「僕」本人は「善人」と自身のことを評しているが、「お人好し」と言い換えることも出来るだろう。加えて、「僕」は単なる「お人好し」ではなく、小西君が津田さんにアプローチしていることに気がつかなかったのだから、「鈍感」とも言うことが出来る。「お人好し」で「鈍感」な人間が、「善人」なのである。「お人好し」であるのは、相手を信頼するという「誠意」を持ち合わせているからだろうし、「鈍感」であるのは、人間はそうした「不完全なもの」であるという佐々木邦の人間観が表れているからであろう。これらの観点は、これまで見てきた諸短篇で見えたとおりである。やはり、佐々木邦の信条というものが、この世間に初めて本格的に発表した「善人」という作品に込められているとみて間違いないだろう。

この短篇は、他の短篇とは違い、語り手の「僕」が出来事を回想しながら語っている。その現場にいたときには気づかなかった小西君の「芝居」や策略を、改めて考えているのである。例えば、「目を悪くした」と小西君が言い出したときだ。当時は気づくことなく、今となっては「芝居」であると思われる。そして「僕」はこう述べるのである。「何うも僕は

善人過ぎて困る」。「僕」は自身が「善人」であるということをしつかりと「自覚」している。ここでの「善人」は、先に述べたとおりである。「善人」であるが故に、気になっていた女性を取られてしまったわけだ。しかし、決して「僕」は、そうした性格を直そうとはしていない。反対に、自身のそうした性格に、真摯に向き合っているようだ。確かに、思い返せば悔しいと思うこともあるようだが、今後改善していくという気概が読み取れない。なぜなら、改善していくとすれば、相手をいちいち疑っていくことになるわけで、疑心暗鬼に陥ることになる。そのような気持ちで、気分よく人間関係を築いていくことは出来るだろうか。この「僕」の人間性を見れば、「善人」でいることを否定的には捉えないだろう。

この作品は、他作品と違って、ラストで「悲哀」というものが感じられる。それは、「僕」が小西君に半ば裏切られてしまったのだから、当然である。佐々木邦が誌上で短篇を発表していき、読者の反応が出てくるようになると、この「悲哀」は消えていく。しかし、佐々木邦は「悲哀」を自身の「諧謔小説」に描出したのである。おそらく、佐々木邦は「喜怒哀楽」というものを表そうとしたのではないだろうか。

読者のような第三者からすれば、他人の「喜怒哀楽」はおかしいものだ。この「善人」でいえば、「僕」が津田さんと「水入らず」だと期待したり、同輩の小西君と仲良くなったという「喜」がある。最後に「哀」しみがあるからといって、作品全体が暗さを主張しているわけではない。人間が必ず持っている感情、つまり「喜怒哀楽」が表れているのである。最後には「哀」しみがあった「僕」ではあるが、「喜怒哀楽」という並びを見れば、次に「楽」が待っている。そう考えれば、「僕」もこれを読んだ読者も、前向きになれるのではないだろうか。

ところで、佐々木邦作品の特色の一つに、「会話の妙」が挙げられる。何が「妙」であるかといえは、会話を読むだけで登場人物の関係性や性格が読み取れる点にある。創作のものであるという不自然さがそこにはない。会話を読むだけで、その現場が目に見えてくる。この「善人」では、「僕」と小西君の会話である。

「小西君、今度のタイピストは美人だね。素晴らしいものが舞い込んだね」

と僕は天真爛漫な観察の結果を口にした。

「然うさね。僕は今日天ぶらを食いたいんだが、君は何うだい？」

と小西君は矢鳥さんの後任よりも当面の問題に急だった。恐ろしく鈍感な男だと思ったが、それは此方の呑み込み違い、これが抑この手だったのだから忌々しい。

「宜かろう。ところで幾つだろうね？」

「さあ、天井なら一つで沢山じゃないか」

「タイピストの年だよ」

「うむ、然うか。さあ、幾つだろうか？ 矢鳥さんよりは若いようだ」

「矢鳥さんと一緒にされちゃ可哀そうだよ。それでも最早一か三だろうぜ。綺麗だから二十そこくに見える」

「馬鹿に熱心だね」

「然うでもないけれど」

「いけないぜ、君、あんなものに迷っちゃ」

「大丈夫だよ」

小西君の惚け具合が存分に読み取れる会話ではないだろうか。タイピストの会話をしているにも関わらず、天井の話で返す。白々しいところであるし、そういつたところが、策士

たるゆえんなのである。

佐々木邦作品には、こうした会話が各作品で繰り返り広げられている。短篇であるから、あまり会話の応酬が少ないが、その少ない会話の中でも、登場人物の性格が違和感なく盛り込まれている。そこにはリアリティがある。本当に家庭や職場であった情景を切り取ったのではないかという錯覚に読者は陥るほどである。では、こうした会話をしている登場人物たちを読者はどう感じるか。おそらく、「愛らしい」と感じるのではないだろうか。見下げることはないと思う。そこには、佐々木邦の目を通して書かれた、会話に見る、個々人の性格のよさが「あたたかく」描出されているのではないだろうか。

三．おわりに

『笑の王国』に収められた短篇から、以上のように佐々木邦作品の特色や「面白み」について見てきた。しかし、まだ『笑の王国』には九作品が残されている。今回、紙幅の関係で全てを見ていくことはできなかったもので、ここに佐々木邦自身の「荒筋」を引用し、紹介したい。

「修身教科書編纂者の話」は、「謹厳の君子人が駈落者の

後援を頼まれる話」。「社長秘書の話」は、「社長が諧謔家もつて任じてゐると下役は是非とも笑はなければならぬ話」。「母校復興」は、「貧乏な母校から会費不要の晩餐招待があつたら警戒する話」。「堅人の話」は、「出納係は女除けのお守りになる顔をしてゐるから何万円紙幣を扱つても火星の伝票と見ておられる話」。「髪の毛」は、「何んな家庭へでも風波を起させる秘法伝授の話」。「損友」は、「友達を一人残らず親友にして利用する男の話」。「夫婦愛」は、「新夫婦がダン／＼所帯染みて行く話」。「運」は、「高等学校を卒業し損ねたばかりに大事業家になつた話」。「禁煙の一生」は、「種々の禁煙法を試みながら結局一生吸い続ける煙草好きの話」。

この「荒筋」を読んだだけでも、「どんな話なのだろうか」と興味をそそられることだろうと思う。

今回考察を加えた七作品以外にも、この『笑の王国』に収められている一六篇には、さまざまな「面白み」が内包されている。その「面白み」について考えてみれば、全ては「あたたかみ」に繋がっていく。その「あたたかみ」は、登場人物の台詞や行動より醸し出される「人情味」からかも知れないし、人間らしい「喜怒哀楽」からかも知れない。それらを

引き出すのは、佐々木邦の作品に対する「愛情」なのである。もちろん、今回のレポートだけで佐々木邦の初期短篇の特色を全て言い尽くせたわけではない。佐々木邦の作品研究には、「夫婦愛」といった視点や、「佐々木邦の見た大正・昭和がいかなるものか」といった、さまざまな見方が残されている。それらは今後の課題とし、別稿を期したい。

(1) 尾崎秀樹「解説」、『佐々木邦全集』補巻五、講談社、一九七五、四一六頁

(2) 岩本憲児「明日は青空 佐々木邦・源氏鶏太のユーモア文学と映画」、『横断する映画と文学』十重田裕一編、森話社、二〇一一、二二〇頁

なお、本稿を書くに当たっては、『佐々木邦全集』（講談社、一九七四年十月—一九七五年十二月）を使用した。全集に収められていない作品に関しては、『笑の王国』（京文社、一九二六年十二月、第四版）を使用し、旧漢字は適宜新漢字に改めた。

【参考文献】

・羽鳥徹哉「佐々木邦のユーモア小説」（『笑いと創造』第三集、ハワード・ヒベット+文学と笑い研究会編、勉誠出版、二〇〇三年一月、二九九頁—三六五頁）

（あいき・だいち 成城大学博士課程前期）



「一年の計」



「恐怖病者」



「或良人の惨敗」